

〈教育・学生支援活動報告〉

通訳翻訳教育を通じたグローバル人材育成の試み
— 札幌大学通訳翻訳エキスパートコースの事例から —

熊谷 ユリヤ

1. はじめに

本稿では、英語会議通訳者として実践と通訳教育を行う筆者が担当する、札幌大学地域共創学群英語専攻の「通訳翻訳エキスパートコース」に於ける英語・異文化教育を考察する。

染谷 (1995) はじめ多くの研究者が指摘するように、日本の通訳教育は、先駆者である欧米とは異なる特殊事情を有している。すなわち、本来は通訳スキル習得の大前提であるはずの語学力向上を両立、多くの場合は、後者を重視しなければならない。本稿で扱うコースも、この問題が顕著に表れた事例といえる。

入学直後の選抜時には平均の英語力が実用英語技能検定 (以下英検) の準2級レベルの学生たちを、通訳翻訳者レベルの英語力と、異文化間コミュニケーションの専門知識を持つグローバル人材に育てるという難題を課せられ、英語専攻教員の協力を得て試行錯誤を重ねてきた。

与えられた課題の高い目標に少しでも近づくため、通訳翻訳訓練と通訳者の視点からの異文化コミュニケーション知識、学内外での現場体験を含めた教育を行ってきた結果、設立3年度目に、二期生と三期生がプロ通訳者としての活動の場を得たこと、公共の場に配架される翻訳物のプロジェクト等を行ったことを含め、一定の成果があったと考えている。

まもなく2回目の卒業生を送り出すこの時期に、学内でも専攻以外ではほとんど認知されていないコースの詳細と成果をまとめ、考察・自己評価したい。このため、通訳翻訳エキスパートコースの特徴と位置づけ、選抜基準と継続条件、および、ゼミナールでの現場体験に向けた通訳・翻訳・異文化訓練について述べる。

更に、コースの学生たちが参加した現場体験の機会について、「学内の現場体験」としての英語圏からの留学生サポートボランティアや留学生との合同授業での通訳、「学外とつながる地域貢献」としての翻訳プロジェクト、「学外の現場体験」として、冬季アジア

札幌大会での外国語ボランティアおよび公式通訳者体験の場に分けて述べ、エキスパートコースの学生たちが、これら体験を振り返った記述式アンケート回答の分析も含め、担当教員が考えるこのコースの意義を結論としたい。

2. 通訳翻訳エキスパートコースの詳細

2.1. 特徴と位置づけ

英語専攻「通訳翻訳エキスパートコース」は、現段階では、その名称から連想されるようなプロ通訳・翻訳者養成コースではない。「将来的に通訳者や翻訳者を目指すことができるような高い国際共通語の運用力とグローバル人材としての専門知識や異文化コミュニケーション能力を習得する」ことを目標に2013年度から開設された専攻内選抜コースである。

企画の段階では、「プロ通訳者・翻訳者を輩出できるようなコースを」という期待もあった。しかし、予想された入学者の平均的英語レベルと、プロ育成養成に必要とされる英語レベルのギャップが大きいため、短期的にそのような目標の達成は難しいという考えから、プロ養成には特化せず上記のような目標に軌道修正した経緯がある。

このコースは1年次から4年次までの8学期のゼミナールで構成される。高度な実用英語運用力と通訳・翻訳に関するスキルや異文化間コミュニケーションの専門知識をつけることを目指すため、具体的には次のような目標が設定された。

まず、「通訳翻訳に限らず」英語を生かした就職ができるように、卒業までに「Non-Nativeとして十分なコミュニケーションができる」TOEIC[®]（国際コミュニケーション英語能力テスト、以下 TOEIC）スコアとされる860を獲得すること、次に、通訳者や翻訳者を「将来的に」目指すことができるスキルと異文化知識を習得させるため、教室内外での通訳・翻訳訓練法による実用英語学習を行う。また、通訳・翻訳訓練法による英語教育だけに終わらせず、現場での体験型学習に向けた学習と位置づけて、アクティヴ・ラーニングを積極的に取り入れ、就業力の増強を図るなどが含まれる。

2.2. 選抜基準

英語専攻では、毎年新入生に対して、「通訳翻訳エキスパートコース」と、英語教員を目指す「英語教育エキスパートコース」、その他の学生たちが所属する「一般ゼミ」の説明を行う。どのゼミナールで学びたいかのアンケートをとり、TOEIC 模試の英語プレースメントテスト、英・数・国の学力一斉テストの成績上位の学生10名前後が、希望のエ

エキスパートゼミナールに配属される。また、テストスコアが上位ではなくても、英検2級以上に合格している希望者は希望のゼミナール所属を認めている。その結果、エキスパート希望の学生を「英語教育エキスパートコース」と分け合う形となり、例年、一年生60～70名のうち、通訳翻訳コースの一部である1年生ゼミナールとしての入門演習(春学期)、基礎演習(秋学期)には、12人から14人が所属する。

2.3. 入学時の平均英語力

欧米のみならず多くの国では、通訳者・翻訳者教育の対象が、複数の母国語を持つか、一つまたは複数の外国語を駆使できる語学力・文化的社会的背景等の高度な知識を持つことを前提としている。日本の場合は、前述のように語学力向上に主眼が置かれることが多いとはいえ、このコースの場合、今年度入学したバイリンガルの特待生を例外として、入学時の英語力は通常の「通訳翻訳コース」には見られない英語レベルの学生も含んでいる。

学生達の個人情報保護の観点から、年度を特定せずランダムに例記すれば、ある年は英検2級以上(およびプレースメントテストで同等の成績だった学生、以下「相当」)計4名、準2級(および相当)が8名とそれ以下が1名、別の年度は2級(と相当)が5名で準2級(と相当)が9名、また別の年度は、2級と相当が5名で準2級と相当が6名、それ以下が2名だった。

文部科学省が設置した「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」によれば、英検準2級のTOEICスコア換算は385～、2級は550～である。毎年入門演習開始直後に実施してきたTOEIC模試の平均スコアは、370～390点前後であった。新入生はTOEICの出題形式に不慣れであることを考慮しても、このコースが目標とする860とは決定的に大きなギャップがある。

更に、英検準2級の出題基準が「高校中級程度」で、審査基準が「日常生活に必要な英語を理解し、また使用することができる」であり、2級は「社会生活に必要な英語を理解し、また使用することができる」で、高校卒業程度の英語力とされる。本格的な通訳訓練は最低でも英検1級レベルでなければ効率的な効果は薄いといわれている。しかし、通訳・翻訳訓練メソッドを応用した英語・異文化教育は、導入法を工夫することでどのレベルにも有用であるという考えに基づいたコースであった。

2.4. エキスパートコース継続条件

2年次にエキスパートゼミナールを継続履修するには、「1年次の英語専攻の必修10科目(Oral Communication I/II, Reading I/II, Basic Writing I/II, Listening, Pronunciation

及びゼミナール) の GPA が 2.7 以上であることが原則である。ただし、GPA には反映されていないが将来性があると認められた場合、または、英語関係の資格やスコアが優れていると判断された場合は、GPA を改善する条件付きでエキスパートコースを認めるケースもある。

履修基準に満たない学生や、エキスパートコースが厳しすぎると感じる学生は一般ゼミに移り、空席補充として、一年時には希望しなかった学生や、成績が足りなかった新規学生を受け入れる。3年に進級時にも、GPA2.7の基準で継続が可能か不可かが決まり、同様の条件で一部学生の入替えがある。

3. 現場体験に向けた通訳・翻訳・異文化訓練

3.1. 位置づけ

染谷 (1995) では、本格的な通訳訓練を効果的に行うための被訓練者の英語力が 1) 語彙、2) 読解、3) 聴解、および 4) プロソディー (発話において現れる音声学的性質) の 4 分野でニア・ネイティブであることが前提とされており、大多数のプロ通訳者養成学校でも、本格的な講座を受けるための基準となっている。語彙数を一例として比較しても、訓練のスタート地点に立つためには、最低 10,000 ~ 15,000 語が必要と考えられているのに対して、エキスパートコース入学時の級・スコアから推察される語彙 3000 ~ 5000 語である。

それでも、このコースでは、通訳トレーニングの要素と一部翻訳トレーニングの要素を実用英語力向上のために取り入れるだけでなく、低学年のうちからアクションラーニングの準備として位置付け、疑似養成訓練も取り入れながら、必要に応じて学内で英語圏からの留学生のための通訳・翻訳や留学生と他専攻の学生のコミュニケーション・サポート等の活動を始められるようにする。

3.2. ゼミナールの内容

通訳翻訳エキスパートコースの基本は、週一度のゼミナールであり、1, 2 年生ゼミでは、通訳訓練メソッド解説、通訳訓練法を利用した語彙構築と英語力向上の演習、ディスカッションとプレゼンテーション、簡単な逐次通訳、自宅学習のための課題出題とチェック、異文化、世界共通語としての英語についての解説、および毎月一度の TOEIC 月末テストを行う。

3 年次からはゼミ教室での TOEIC や英語力向上の訓練の割合は減少し、課題の解説と月末テスト以外は、通訳・翻訳実践、就職活動を意識した日本語・英語によるディスカッ

ションやプレゼンテーションとその通訳等を中心としたゼミナールが増えてくる。

4年次のゼミナールでは、3年次の要素に加えて、異言語・異文化間コミュニケーション関係の卒業研究に向けたレクチャーやディカッション、進捗状況のプレゼンテーションが中心となる。

翻訳訓練については、通訳のような瞬時の訳出ではなく、辞書や資料を調べる時間的余裕があること、英日の場合、目標言語の表現力がカギとなることから、通常は、翻訳訓練法よりも通訳訓練法に重点を置くこととした。実務翻訳の基本を解説と、身近な資料を用いた翻訳演習、例えば、留学生のためのキャンパスマップの英訳、キャンパス施設の説明の英訳、学生のためのポータル「アイトス」の使用法、近隣の店舗の紹介などをこれまで行った。

3.3. 関連科目内容の先取りと並行履修

通訳翻訳エキスパートコースの入門・基礎演習では、2年次以上の履修科目「通訳Ⅰ/Ⅱ」「TOEFL A/B」「TOEIC」をはじめとする通訳・TOEIC・TOEFL 関連科目の内容の一部を先取りしている。特に、2年次からの協定大学留学を目指す学生には、留学試験TOEFLの個別指導も必要に応じて行い、1、2年次での出願に備えている。

また、1年生から履修可能な留学生科目「Japanese Affairs-D/E」や、2年生上の「通訳研究」「専門英語研究（観光）」をはじめ、翻訳関連科目、コミュニケーション関連科目・上級英語関連科目も履修を強く勧めている。

4. 学内の現場体験

4.1. 日本語チューターと留学生サポートボランティア

通訳翻訳エキスパートコースの学生は、ESS参加・留学生科目の履修・留学生イベントへの積極的参加、アメリカ、ニュージーランド、フィンランドなど英語圏からの留学生をゼミランチに招待するなどの触れ合いを通じて、その年度により多少変動はあるが制度としてではなく自然発生的な留学生サポート活動を行っている。その他、毎週曜日を決めての留学生英会話グループのサポートや、留学生との合同ランチなども行い、その延長として、日本語講師から、留学生の課外チューターを依頼される学生もいる。

この活動を行った学生たちの記述式アンケート回答は、「留学生と過ごす時間がチューターをしていると自然と長くなるため、生活に密着した英語を学ぶことができた」「国ごとの独特なアクセントを理解ができ、英語の使い分け方、使いわける理由も知ることがで

きる」「頼り頼られる存在になるのでほぼ毎日一緒にいるようになり、語彙力とともに発音までもが3～4ヶ月で一気変わった」などが代表的である。筆者による観察でも、他人からもわかるほどの成長を遂げることにより、人の役に立つ嬉しさも相まって、英語を勉強して行く上での活力となり自信にもつながっていく様子がわかる。

4.2. 留学生科目での通訳

筆者が担当する留学生科目「Japanese Affairs-D/Japanese Society and Culture」（春学期）「Japanese Affairs-E/Japanese Business Communication」（秋学期）は、授業前半が英語と要約日本語訳のレクチャー、後半が留学生1人につき日本人学生4～7人のグループ・ディスカッションである。英語専攻以外の学生も履修するため、通訳翻訳エキスパートコースの学生は、英語を話さない学生と日本語を離さない、または、うまく説明できない学生の間の通訳をする。通訳者役の学生が行き詰ったときは、挙手をすれば筆者が行ってアシストをする。

この活動を行った学生たちの記述式アンケート回答は「自ら英語で話すことのみならず、他専攻の方々の日本語を英訳するということは、他では経験したことのないことだったのでとても苦戦したが、振り返ってみれば新鮮で有意義な時間を過ごせた」「言葉をそのまま通訳することだけが通訳の役目ではなく、双方が理解できるように、少し表現を変えたり短い情報をつけて通訳をすることが、より良いディスカッションや双方の理解につながるようになった」「必然的に多くなる言葉をまとめ、相手に簡潔かつ直接的に訳すことがとても難しく、慣れるまではとても大変だった」「日本語を勉強したい外国人のため、留学生が分かりそうな内容や本当に簡単な話題は日本語のまま話し、難しい話は英語も踏まえて訳すという取捨選択的通訳をした」「直接的に言い表さない日本語を、直接的な英語に訳すのが難しかった」など、通訳が単なる英訳・日本語訳を口にするのではないことを身をもって体験した。また、ゼミや通訳の授業では絶句したり諦めてしまう学生でも、自分が訳さなければディスカッションが成立しないという、ある種の使命感を持って、限られた語彙や表現でも何とか伝えようという姿勢が見えた。

5. 「学外とつながる地域貢献」 豊平区翻訳プロジェクト

昨年度は、2月の冬季アジア大会で増加が見込まれる外国人訪問者のために、大学がある札幌市豊平区から地場産食材の料理を載せた英語版リーフレットのための英訳を依頼された。当エキスパートコース内の翻訳プロジェクトとしてコンテストを行い、優れた翻訳

を選んで採用したリーフレットは紙の印刷版とともに、区のウェブサイトにも掲載された。

今年度は、たまたまそのリーフレットを見た英語版クックパッドの担当者が、区に英語版レシピを依頼。再び当コースが豊平区の依頼を受け、豊平区の子供レシピコンテストを英訳するとともに、こちらからの提案で、1年生を中心にオリジナルレシピを考案し、それも英訳した。

学生のアンケート回答は「レシピを英語で、どのように作り方を伝えるかが、難しかった」「今まで知らなかった表現方法を知ることができ、とてもいい活動だった」「英語ならではの調理の表現方法の新しい発見（大さじ一杯=1 Table spoon など）が多くあった」「リーフレットやネットに載って世界中の人の目に触れる可能性があるのも、簡潔にわかりやすく英訳するように工夫した」「大変な作業でしたが貴重な経験になった」「英語翻訳をして謝礼をもらったのは初めてで感激した」「社会のための翻訳を体験し、また自分の中で経験値が上がったのではないかと感じた」などがある。

両プロジェクトについて、豊平区からは、参加ゼミ生一人当たり500円（レシピ翻訳）から2500円（英文校正）の大学生協買い物券が謝礼として提供された。学生たちは公共の場に配架される印刷物や区の英語サイトにアップロードされる情報を英訳するという、地域に役立つ活動を通じて、生涯で初の「有償」翻訳をしたことになる。更に、このプロジェクトを知った北海道新聞の記者が教室に取材に訪れ、朝刊紙面にゼミ・ディスカッションのカラー写真とともに掲載され、学内だけではなく地域社会とのつながりを再確認できる資料となった。

6. 「学外の現場」2017 冬季アジア札幌大会

6.1. 大会と外国語ボランティア

2017年2月19日～2月26日、札幌市で「2017 冬季アジア札幌大会」が開催され、アジア・オリンピック評議会加盟のアジア29か国・地域、オーストラリアとニュージーランドが参加した。

通訳翻訳エキスパートコースのうち、公式通訳者募集締め切りの段階でTOEICスコアが750に達しなかった学生たちは、特別な事情がある場合を除いて全員、大会の外国語ボランティアにゼミ単位で応募させた。ボランティア学生たちは、延べ約4000人のボランティアスタッフの一員として、各国のチーム付・インフォメーションセンター・競技会場係・大会運営補助など様々な役割を担った。

6.2. 外国語ボランティア体験から学んだこと

学生の感想としては、「チケットチェック担当として、いろいろな国の外国人に英語で話しかけられた」「自分の英語が大会参加者に伝わったことで英語力に自信がついた」「大会を外国語で支えただけでなく、経験豊富なボランティアの大人と触れ合い、貴重な話を聞いた」など肯定的なものもあった。

一方、「通訳をする機会はなかったので、今度は TOEIC をもっと頑張って公式通訳をしたい」「ゼミでアジアの英語の特徴を聞いていたが、ビデオでしっかり復習をしなかったので、リスニングができなかった。機会があれば今度はしっかり準備して通訳をしたい」など、次回への抱負、学習の動機付けにつながった。中には春学期中と夏休み終了時に受験した学生たちの TOEIC スコアが、200 点前後上昇し、中には 250 点以上の上昇をみた学生もいた。

6.3. 大会公式（プロ）通訳者

大会で必要となる約 200 名の公式通訳者の募集も、ボランティアとほぼ同時期にあった。プロ通訳者として既に活動している人や通訳学校で学んでいる人だけでは足りず、公募による選考があり、応募資格は TOEIC スコア 750 以上または相当するスコア・級であった。

該当する 3 年生 1 名、4 年生 5 名を含む通訳・翻訳エキスパートコースの学生も応募した。リスニング中心の筆記試験と書類審査後、面接試験は英語プレゼンとアジア英語を聞いての逐次通訳実技で、筆者ともう一人の会議通訳者が英語面接官を務めた。

学生たちは A, B, C ランク、補欠という選考基準のうち、B ランク 4 名、C ランク 2 名に相当する成績で全員合格し、VIP 付き、事務局付き、競技などの通訳業務を担当した。1 年間の交換留学帰生が 2 名、5 人が留学生科目で通訳経験者であり、1 年時からゼミで通訳訓練を受け通訳研究も履修していた。

6.4. プロ通訳者としての業務体験から学んだこと

学生たちの感想は次の通りである。「アジア大会という事もあり、話されていた英語の多くは英語を公用語としない国が殆どだったので、英語は主にコミュニケーションを図る為に使用されていた言語だった。今まで学習してきた英語の楽しさや奥深さを再認識できる経験となった」「海外からの観客で普段英語を話さない人たちも必死でコミュニケーションを取ろうと、拙い英語で問いかけてくる姿勢は、多くの日本人も見習うべき事だと感じた」「非ネイティブと関わる事がほとんどで、英語でコミュニケーションをするときには、対話の相手にこちらの意図を察してもらうことを期待せず、また誤解を生まないことに気

をつけ、できるだけシンプルに、正確に伝わる語彙を優先的に選んだ」「大会関係の専門用語を覚えることや選手の名前を英語で発音することに難しさを感じた」「タイ、モンゴル、UAE、シンガポール、香港の選手を担当し、授業で学んだアジア英語アクセントの実践になった」などがあった。

選考試験採用後の全体研修は筆者が担当したが、その研修で指導しスキルやプロとしての心構えは、すでにこの学生たちが学んできたことの復習の機会となった。また、授業やゼミで「訳出を早く始めること」「木を訳すのではなく森を訳すこと」「万一分からない単語があった場合も、知っている単語や表現を駆使して素早くメッセージのコアを伝えること」「国際大会通訳の現場では予期しないことが次から次へと起きるので対人関係や状況の処理能力も重要」など、教室で指摘されていたことの意味が現場に出て実感できたようだった。

7. 現場体験から得たその他の成果

7.1. 異文化に対する配慮と自文化再発見

通訳の現場を体験した学生たちは、ただ通訳するのではなく、対象者の文化・宗教・歴史などに配慮する必要も学んだ。例えば、大会でイスラム教徒のIOC役員についての学生は、ハラール料理を扱っているレストランを探す業務を通じて、異文化理解の地平線を広げた。

また、留学生科目のディスカッションの通訳では、日本人は話し合いをする時に、ある議題やその人について深く掘り下げてみようとするのが他国に比べて少ないこと、それを自覚している人が少ないことを実感。沈黙を失礼だと感じる留学生から「日本人の沈黙は怖い」という声を聞いて沈黙を貴ぶ日本を再認識し、グローバル化を強く推し進めている中で日本人が改善すべき点だと感じたという。

7.2. 就職活動やインターンシップに役立った点

3年生、4年生によれば、インターンシップや就職の説明会・面接で、「通訳翻訳エキスパートコース」に在籍していること、アジア大会で外国語ボランティアをしたこと、公式通訳として業務をした経験などが関心を引いたという。

競技会場での通訳業務をした学生や、大会事務局でVIP対応業務をした当時3年生は、一年後に振り返って、「正直、事前には就職活動に向けて準備することがたくさんあるのに、応募したことを少し後悔。しかし、実際に参加してそんな思いが吹き飛んだ」「毎日が新鮮で楽しく、担当の組織委員会スタッフが仕事ぶりを褒めてくれたので、やりがい

感じた」「大会事務局補助業務では、国際大会での接遇を学べた」という回答を寄せている。別の公式通訳体験者は TOEIC のスコアも目標を達成した学生であるが、「通訳ボランティア」ではなく、「公式通訳者」のネームインパクトは就職活動において非常に大きく TOEIC スコアよりも面接官が目した」という。大会で国際的な業務の現場で働く社会人と接した経験とあいまって、現場経験を就活の面接でも生かすことができた例といえよう。

8. 教室の延長としての現場体験の意義

教室で通訳・翻訳・実用英語・異文化コミュニケーションを学ぶ学生にとって、現場体験の意義とは何か、という設問に対して、「初めは自分には荷が重すぎると思っていた通訳業務でしたが、通訳現場を体験する事は英語を学ぶ者にとっての夢であり、同時に目標でもあると思うので、機会があるならば積極的に挑戦すべきだと分かりました」という機会としての意義、「ボランティア通訳では、日常会話程度のものがほとんどだったので、通訳の難易度としては低いですが、会議やメディア向けの通訳では、更なる通訳技術と日英の語学力の必要性があるのだろうと強く感じた」というコミュニケーターの役割を認識でき、更に上を目指そうという意識付けの面からの意義、「話せない、訳せないというネガティブな態度だったのが、現場では積極的にコミュニケーションの橋渡し役を務めなければならなかったので、学習のモチベーションが高まった」という、動機付けとして最も意義があるという意見が代表的だった。

また、スポーツに例えて、「学校での勉強は練習でしかなく、自己の実力を知るためには、試合をする必要があります。英語学習において試合とは、通訳現場を実際に体験することです。それ通じて、自身の英語力で不足している分野の発見や学習意欲の向上が期待できます」という回答や、「現場に出てみて、これまでの教室での学習は浴槽か小さなプールで泳ぐ練習をすることでしかなく、現場は海で泳ぐことに似ている。現場に出てみなければそれはわからなかったし、通訳者になるわけではなくても、国際的な実社会という海に出るために不可欠な経験だった」という回答もあった。現場を体験し、体験を重ねることで、モチベーションが上がり、知識を深めることができ、その経験は人生にも役立つものとなる。卒業を控えた学生の、「大学での学習成果を発揮・証明するために、現場経験は大いに役立った」という一言が印象的だった。

9. おわりに

ある新設コースが成果を上げているかどうかを、何で測るか、どの時点で測るかについては、議論があるところだ。筆者自身が掲げた目標ではないが、一番わかりやすい TOEIC スコアについても、通訳者としての能力と TOEIC スコアは直接的な関係はない。それでも、当コースの1年生から3年生たちは、毎月 TOEIC 模試と語彙構築に追われながら、公式通訳の応募基準や就職の採用条件の TOEIC スコアを見て、これまでの努力が採用の際の基準となることも実感できたはずだ。

ちなみに公式通訳応募の時点では6名のうち TOEIC スコアという点からは、2期生のうち2人を除いてほぼ目標を達成できた。大会公式通訳業務の時点で800点以上が4名、そのうち840と810だった2名は、入学時は英検準二級レベルの学生だった。当時スコア700点台相当だった3年生は、現場体験でモチベーションが高まり、845を取った後も、最終目標とされた860を超えることを目標としている。

もう一つの分かりやすい判断基準は就職先かもしれないが、学生たちが必ずしも英語を使う仕事を希望しているとは限らないし、英語を使う会社に合格してもそこで就職活動を止めずに、英語・国際というキーワードより生活の質を求めて更に挑戦を続けた学生もいるため、判断とはならない。それでも、海外の旅行会社、航空関係、空港関係、IT関係、銀行で国際部での活躍を期待された学生、国際交流関係、英語関係の会社設立などの夢をかなえた学生たちも多い。

事務方は、オープンキャンパスのエキスパートコース説明会の参加人数で判断するかもしれない。しかし、ゼミ生たちに意見を聞く限りでは、入学前の高校生たちにとっては、ごく一部を除いて、「通訳」「翻訳」「エキスパート」というキーワードは、たとえ憧れがあったとしても、自分とは無縁の世界と響くらしい。

それでも、今回、当該コースの内容と成果を振り返り、学生たちの声を聴いてその一部を考察してみると、札幌大学通訳翻訳エキスパートコースにおける、通訳翻訳教育を通じたグローバル人材育成の試みは、様々な課題を抱えながらも、前述した様々な面で、一定の成果を上げることができたと言えよう。

< 参考文献 >

- Gile, Daniel (2009) Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training, John Benjamins Pub Co.
 門田修平 (2015) 『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』コスモピア

- 新崎 隆子, 石黒 弓美子 (2013) 『英語スピーキング・クリニック ——通訳訓練法で鍛える知的英語力』
研究社
- 新崎隆子 (2005) 「英日逐次通訳プロセスを応用した英語学習」, 『通訳理論研究』第.5 巻 : 183-202.
- 染谷泰正 (1995) 「日本における通訳者訓練の問題点と 通訳訓練に必要な語学力の基準 ～第 39 回通訳理論研究会報告要旨～」, 『通訳理論研究 10』第 6 巻 1 号 (1995:46-58)
- 染谷泰正 (1996) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」, 『通訳理論研究 11』第 6 巻 2 号 (1996:27-44)
- 田中深雪 (2002-2003) 「リスニングに生かす通訳の訓練メソッド」『時事英語 CURRENT ENGLISH』第 57 巻第 1 号～第 12 号 研究社
- 田中深雪・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・中村幸子 (2007) 「通訳クラス受講生たちの意識調査 . ～ 2007 年度実施・通訳教育分科会アンケートより～」『通訳理論研究』第 .7 巻 : 253-263.
- 鳥飼玖美子 (1997) 「日本における通訳教育の可能性—英語教育の動向をふまえて」『通訳理論研究』第 13 号 : 39-52 通訳理論研究会
- 北海道新聞記事「2017 冬季札幌大会 スポーツ通訳いろは学ぶ - 道内 150 人参加 初の研修」2016/10/30
北海道新聞記事「札幌大生, レシピ英訳に挑戦 地場産食材の料理を世界に」2018/2/20

< 参考 URL >

- (参考 1) 主な英語の資格・検定試験 - 文部科学省 (2018/2/2 17:15 アクセス)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2015/03/25/1356121_02.pdf
- 各級の目安 | 英検 | 公益財団法人 日本英語検定協会 (2018/1/6 00:17 アクセス)
www.eiken.or.jp/eiken/sp/exam/about/1.HAI 北海道通訳アカデミー www.hokkaido-ia.jp/
- [PDF] TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表 (2018/2/2 17:28 アクセス)
www.iibc-global.org/library/default/TOEIC/official_data/1r/pdf/proficiency.pdf 1.
- 第 8 回アジア冬季競技大会 (2017/ 札幌) - JOC (2018/1/20 08:10 アクセス)
<https://www.joc.or.jp/games/asia/2017/>
- 2017 冬季アジア札幌大会組織委員会「2017 冬季アジア札幌大会」のボランティアの募集について (2018/1/20 20:34 アクセス)
<https://prw.kyodonews.jp/opn/release/201604220093/>
- 2017 冬季アジア札幌大会 公式通訳者募集要項 公式通訳者募集要項 (2018/1/21 23:49 アクセス)
https://www.ec-pro.co.jp/pdf/asian-games_outline_3.pdf